

— 鉄鋼ニュース —

世界冶金会議の開催

第2回世界冶金会議は、11月2日から8日まで、米国シカゴ市で開かれるが、わが国からは大日方東北大学教授を団長とする35氏が出席団を組織してこれに参加することになり出発した。

第2回世界冶金会議は、アメリカ金属学会が主催し、米国々会が最大の意義をもつ国際的科学会議であるとし協賛後援するもので、世界の自由諸国39か国から約400名の学者、技術者、経営者などが参加することになっている。参加者は会議前10月20日ニューヨーク市を振出しに9班にわかれて東部各州の工場視察を行う。また会議中は世界各国から出品されるメタル・ショウ（金属博覧会）も催される。

鉄鉱石確保5か年計画

通産省では、このほど鉄鋼長期需給計画に伴う所要鉄鉱石の確保計画をまとめた。これによると32年度から37年度までの5か年に470億円を投入して海外鉄鉱山の開発をはかるとともに、44隻の鉄石専用船を建造して輸送に万全を期することになっている。

まず所要輸入鉄石は、32年度の900・6万tから1692万tと約倍増することになっているが、これを供給源別に見ると、フィリピンのマテララップ、シブゲイ、ブラカン、サンタアイネスなどで149・5万tから281万tに、またインドは132・7万tから305万tに、マラヤが284・1万tから454万tとそれぞれ大巾に増加することになっている。この開発資金としては、フィリピンに108億円、インドに180億円、マラヤに72億円が投入される計画である。さらに南米にも72億円を投入して44・8万tを150万tに引上げる予定である。

このように鉄石の輸送量も32年度の900万tに対して37年度には1692万tに増大することになるので、この対策としてこの1692万tのうち948万tを鉄石専用船の運航によつて処理したい考えである。これには606・4億円を投入することを考えているが、この建造計画としては、1・5万t級22隻、2万t級16隻、4・5万t級6隻を37年までに完成しようとしている。

なおこの基礎となる37年度の出鉄計画は高炉鉄1191万tとなっている。

マラヤのタマンガン鉄鉱山の開山

鋼管鉄業では、かねてマラヤのタマンガン鉄鉱山の開発を進めていたが、このほど完成したので、10月20日現地で渡辺社長出席のもとに開山式を挙行政した。タマンガン鉄鉱山は鋼管鉄業が29年以來同鉱山に11億5千万円を投入して開発工事に着手していたもので、山元から積出し港のトンバ港まで三哩半の鉄道敷設と同港の港湾、積込み、発電設備などの諸設備を完成したものであ

る。鉄石の船積みは10月中旬から開始できるわけだが、モンスーン期に入るので、とりあえずトンズ港に貯鉄し、モンスーンあけの3月から再開することになっている。これによる積出量は年間40万tから50万tが予定されている。

熔鉄炉百年祭挙行

岩手県、釜石市、富士製鉄、日鉄鉄業共催の熔鉄炉百年祭の式典が10月15日釜石市橋野高炉跡で盛大に行われ、わが国洋式高炉建設の先覚者大島高任氏の偉業を偲んだ。

大島高任氏は南部藩の蘭法侍医周意の子で、文政9年(1826年)盛岡市仁王小路に生れた。氏は弘化3年(1846年)21歳で長崎に赴き蘭書によつて砲術、採鉄、精練を学び、その学才により水戸藩の鉄製大砲鑄造事業に招かれて参画し、反射炉の設計築造、それに要する耐火煉瓦の調達、大砲熔製まで担当した。ところが鑄造材料鉄の欠乏と不適性とから、南部藩の釜石附近大橋に洋式高炉を築造し製鉄をおこなつた。そして安政4年(1857年)高炉製鉄に成功した。これがわが国において砂鉄によるタタラ吹き製鉄から鉄石による高炉製鉄に転じた最初の成功であり、日本の製鉄史上はもとより、日本産業史上に一時代を画したものである。この大橋の遺跡は詳らかでないが、大橋から一兩年おくれで大島氏によつて指導築造された橋野高炉遺跡が現存しているので、今回この地で百年祭の式典を挙行政したものである。なおこの橋野高炉跡は本年6月文化財に指定された。また郵政省では、これを記念し、記念切手800万枚を12月1日から発売することになった。

室蘭製鉄所第2高炉火入れ

富士製鉄室蘭製鉄所が総工費5億5千万円を投じて、きる7月から着工した仲町第2高炉の改修工事はその後完工、10月1日火入れを行つた。改修された同高炉はわが国最新のオートメ設備を誇る鉄皮式高炉で、最大日産量は鉄鉄1000tを出鉄する国内有数の大高炉となつたものである。

同高炉は26年の火入れ以来、今年6月30日の吹止めにていたるまで2,100日間操業して、137万tの鉄鉄を出鉄したが、炉内の煉瓦の寿命が尽きたため全面的な改修工事ににかかつたもので、新高炉は従来の鉄帯式を最新の鉄皮式に改修し、日産量は700tから900tまでに炉体を拡張したほか、鉄石、石灰、コークスなどの鉄鋼原料を送りこむ原料捲揚速度をスピードアップし、炉内の天井および炉底の温度や送風量などは炉内に設けられた各種計器で自動的に記録調節できるようにオートメ化されたものである。